

坂田道太氏インタビュー

1996年2月23日(金)

五十嵐 きょうは坂田先生に防衛庁長官当時のお話を伺わせていただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

坂田 振り返ってみると、あの時期は時代の転換期で、おもしろい時期じゃないかな。その意味では、ニクソン・ドクトリンは、思い切った提案でしたね。当時はそれほどの感じはしませんでした。。

五十嵐 戦後の防衛庁長官で、それこそ名前を残す方はそんなにたくさんいらっしゃらないと思いますけれども、坂田先生が一番最初におつくりになられました防衛計画の大綱は非常に重要なものになると思いますし、久保卓也さんのお書きになったものをいろいろ拝見しておりますも、戦略論としても非常に感心させられるようなものがありましたので、70年代の転換点を経て、現在また考えなければいけないような問題が多いのではないかと考えております。

坂田 これまで安全保障とか防衛とか考えたこともなかった私が、たまたま防衛庁長官になった。最初は法務大臣になるはずだったのです。法務といたら法律問題でしょう。ところが法律は何にもわからない。だけど、教育関係ならずとやってきたものですから、例えば自衛隊の隊員の教育ということならば多少考えられるんじゃないだろうか。そういう気軽な気持ちで引き受けちゃったんです。

しかも、ちょうどニカラグアの大統領が就任するので、就任式に行っていといわれた。田中さんは、「もう首相をやめる。坂田とは仲よしだけれども、何にもしてやれなかった。せめて特使で女房を連れて外国へ行ってくれば」というわけ。ロンドンに着いたら、すぐ日本に帰れといわれたのです。なぜ帰れといわれたかということ、三木さんが総裁になったというんです。

それは仕方がない。せっかく女房を連れて、フランスやドイツを視察すればいいと思っていたのですけれども、それができなくなった。パリのホテルに家内を案内。すぐ飛行機に飛び乗って、日本に帰った。翌日、三木さんを総理に指名する国会が開かれた。新内閣は私を防衛庁長官に任命した。そもそもの出発点がそういう経緯です。

ところが、私は長い間政治をやっているもので、素人で防衛を考えてみるのも意味があるか。あってもいいんじゃないか。

後でも申し上げたいと思いますが、政策意思決定の方法が、今まではどうだったか。文

部などでずっとやってきた経験からいうと、秘密主義です。内部で固めそれを発表する。発表した途端に集中砲火を浴びて、水際でだめになっちゃう。国会に出ても、もうどうにもならないんです。水際でつぶされるというやり方を繰り返していたわけです。

そういうことではだめじゃないだろうか。特に防衛問題というのは、国民のコンセンサスを得なきゃいけない。少なくとも一政党の支持だけではだめだ。複数政党の支持するような政策でなければコンセンサスは得られないし、コンセンサスの得られないような防衛政策では、基本的に意味を持たない。そういう意味合いにおいて、国民のコンセンサスを得られるような何らかの防衛政策はできないものだろうかと考えたわけです。

そこでいろいろな人から話を聞きました。例えば「防衛を考える会」をつくりましたが、あのメンバーの選び方も、私自身真剣に取り組んだわけです。詳細は省きますが、例えば前にアメリカ大使をやられた牛場信彦さん、それから、朝日の荒垣秀雄さん、NHKの平沢和重さんを入れた。ある程度の専門家ということでは佐伯喜一さん、経済関係では金森久雄さん、若手のメンバーでは高坂正堯さん、国会関係で河野義克さんを入れた。女性関係では角田房子さん、そのほか、荒井勇、緒方研二、村野賢哉さんなど。これは私の意思でやったことです。

やはりそのアプローチのやり方に、私は非常に関心を持って取り組みました。新しい政策意思決定の方法が、従来は秘密主義であったのを、むしろオープンにして小出しに出していく。そうすると、それを新聞が書く。それを大勢の人が読む。反応がある。それを世論が問題として取り上げる。それで原案を多少修正していく。こういうことを繰り返していくうちにコンセンサスができる。

後で詳しく申し上げますが、ユニホーム（制服組）の反対とかなんとか、若干心配されている向きもありましたけれども、これは内部の問題で、大したこともなかった。実際、大綱を提出するのに2年はかかっていますけれども、計画大綱を出したときには、国会ではほとんど問題にならなかった。従来は法案を出すことを口にするだけでだめになっちゃう。中曽根君の場合もそうでした。防衛問題はタブーだった。

ところが、日米防衛協力というのは、突然の質問から派生した問題ですけども、むしろユニホームだけでそういうことをやっているのはよくない。しかし、シビリアン・コントロールのもとでこれをやるのは結構な話なんだと、逆手にとったんですね。何も逆手をとるつもりはなかったけれども、結果としてそうなっちゃった。だから、余り問題にならなかった。問題にならなかったというよりも、野党が質問して、それに答えたんだからと

いうわけで、シュレジンジャーとの国防問題の導入部分をみんなの前であからさまにしたわけですから、自然な形でシュレジンジャーとの会談が行われた。そして日米防衛協力が実現した。

今までは中曽根君が防衛白書を出していますけれども、続かなかった。私からいわせると、防衛理念がないから、それは続けて出せないはずなんです。説得するようなものがないからです。今まで、何でこういう国際的に非常に大事な問題について、そういうアプローチをしなかったのだろうかと思議に思いました。その1つの手段として「防衛を考える会」を発足させたのです。その後、防衛白書はずっと続けて発表していますね。これはやはり大きいと思う。そして、当時から英文も出すべきだといったのです。

私は文部大臣のときもそうでしたけれども、文部広報があるのですが、役人はそれに書けば、何か津々浦々あるいは各階層に知れ渡る情報だと思込んでいるんです。とんでもない話だ。1000部か2000部ぐらいのものでは、そんなものではないんだ。それよりも新聞各社が毎日こぞって書くから、それが途絶えないように心がける。だから、終わってしまったら、同じことの繰り返しを各社が書いてくれていたわけです。そのうちにコンセンサスができちゃったから、これができ上がったときには、国会でスムーズに許容された。これは今までにないことです。その点で、私が新しい政策意思決定の方法を導入したことにおいては意味があった。それがまず最初に申し上げておきたいことです。

もう1つのプリンシプルは、核時代における戦争は限定的である。目的、手段、方法、時間、場所が限定される。それには前提として米ソのパワーバランスがある。死活的な地域においては、ちょっとしたことでもどうにもならないから手出しができない。しかし、それ以外のところでは小さい軍事力がまかり通る。アンゴラなんか小規模で、それは米ソの方でも承知済みです。しかし、ヨーロッパ大陸と米ソの対立、あるいは米、英、仏、独との対決の場においては、そういうがっちりしたパワーバランスがあって、戦略核兵器削減交渉が次第に積み重ねられてきた。一番最初は、1972年に戦略兵器制限条約（SALT I）に調印、73年には核戦争防止協定ができ上がりました。

このような核時代においては、小さい紛争や戦争は起こり得るけれども、それは限定的なんだ。目的、手段、方法、時間、場所が限定される。朝鮮戦争も結局はそうだった。中東戦争もそうだった。拡大するかもしれないけれども、それは小さい軍事力である。しかし、これをうまく利用することによって大綱ができ上がるという考え方ですね。それも背景として、日米安保条約があって初めて、小さい日本の軍事力が意味を持つ。ですから、

日米安保は今まで考えられてきた以上に重要な意味合いを持ってくるんだという考え方がそこから生まれてくる。だから、私はそのときに、「スモール・バット・ハイクオリティー又はラージ・ロール」と申し上げた。「小さいけれども大きい役割を果たす」とはそういう意味なんです。

また、日本が小さい軍事力しか持たないという一面があれば、これはアジア諸国に対して、日本が再び軍国主義になるのではないだろうかという心配をある程度和らげる作用を起こす。そういう意味合いにおいて、日米安保はアジア諸国に対しても意味があるのではなかろうか。また、そういう国々からいうならば、日米安保があるがゆえに、アメリカが加わっているがゆえに、日本を押さえられるという安心感を与えられるという意味合いがある。このように、小さい軍事力が核時代における意味合いを持ってきたという1つのとらえ方は、やはり私の大綱策定における重要な意味を持つプリンシプルです。

もう1つのプリンシプルは、基盤防衛力です。これは昨夜から考えていたのですが、少しいい過ぎだけれども、「伸縮自在の基盤防衛力の仕掛け」といいます。どうもわかっておられるかどうかわからないんだけど、平和時はこれだけだ。しかしながら、緊迫した状況が出てくると、あるいは戦時になれば、これを基盤にして拡大していく。「基盤防衛」という言葉も、最初は「基幹防衛」だったんです。私もよくわからないけれども、これはユニホームがよく使う言葉で、防衛庁内部の言葉なんです。たしか久保君も基盤という言葉を使っているけれども、久保君の発想かどうか、その辺があいまいなんです。

五十嵐 71年2月20日の久保さんの論文に使われていますね。

坂田 それならば、あったんですね。この発想は久保君から仕入れたんだらうと思う。この辺は時間のずれがあるから、今の時点で考えたり、そのときのものでないと意味を持たない。

例えばお話ししたいと思っていたのは、1975（昭和50）年に、ベトナム撤退でアメリカはフリーハンドを持った。それをセクターという人（タイムの記者）やノバックという人（アメリカのコラムニスト）に話しているんです。1973年にパリ和平協定ができたときに、すでにアメリカの最高方針としては、大陸から撤退することが決まっていたのではないだらうか。それは早晩やってくることだった。

ただ、最後の仕上げが余りうまくなかったことはあった。あるいは翌年の1976年がアメリカではちょうど独立戦争 200周年を迎える。200年祭を迎えるアメリカとしては、もう1年くらいは頑張っていたかっただらう。だけれども、サイゴンは落ちた。世の中のこと

は何でも 100%うまくいくものじゃない。ところで、日本はどうだったか。日本は第二次大戦で失敗した。泥沼にはまりこんで歯どめが効かなかった。ところが、アメリカは撤退することができた。それは何でもなかったようだけれども、大変な違いだった。アメリカはシビリアン・コントロールというか、民主主義の原則に立ち返った。そして新しいアジア政策あるいは外交政策を展開した。その意味においてアメリカはフリーハンドを持ったという見方を私はとったわけです。

これもどこかに書いているのですが、独立戦争は、アメリカの市民兵とイギリスの正規軍とが戦ったわけですね。そして市民兵が勝ったんです。

五十嵐 詳しくいうと、ちょっと違うところがありますけれども。

坂田 そうなんですか。私は、そのときはそう思っていた。そのときに思い出したのは、私は九州の熊本出身なんです。西南戦争では、谷干城や、乃木希典は、いわば武力集団である西郷隆盛の軍隊と戦って、明治10年に勝利をおさめるわけです。このようにやはり世の中は変わってきた。そして、日本もその後、日清、日露戦争と軍隊組織をつくり上げていく。

その場合に、全くの民兵といいますか、今までの武士的な基盤でなく、武力集団でない民兵組織が勝ったことの意味は大きい。またアメリカの独立戦争が影響してナポレオンの軍隊組織が生まれたと言われると、これはなかなか大事な点です。

平和時においては、小さい軍事力でいい。平和時においても戦争当時の軍事力の物量そのものを継承、持続させるのは、大変なお金がかかる。それから人がなかなか得られなくなる。だから、アメリカでは田舎に帰したと思うんです。海空は別として、特に陸は郷里に帰すという原則が自然な形で出てきた。

そうだとするならば、日本の基盤防衛力は、質の高い限定された小さいものであってもいい。それはふだん保持しておくべきことであって、それがしょっちゅう平和時においても、戦時の大きいままでずっと保持するならば、その負担は大変なものだ。軍事力というものは、戦時においてはむしろ住民の平和と自由を守るための生存の基本を守るものであるけれども、平時において軍事力が拡大してくると、それはえてして危険な要素になる。だから、それはむしろ伸縮自在で緊張が緩和したら縮小するやり方はどうだろうか。

日本の場合を考えると、全く財政的に行き詰まって、第一次防、5800億円、第二次防、1兆2000億円、第三次防、2兆3400億円、第四次防、4兆6300億円と倍増、倍増、倍増で来たけれども、結局達成できなかった。しかもまた、制服はそこまでやったけれどもでき

なかったという失望感を持った。そういうムードも胚胎していた。その意味合いにおいて、基盤的防衛力という形でこれを考えていくのは、おもしろい装置ではないだろうか。そういう意味合いで、私の「伸縮自在の基盤的防衛力の仕掛け」の考え方が出てきているわけです。

五十嵐 そもそも基盤的防衛力の考え方というのはそういうものだったわけですね。

坂田 当面10年ぐらいの間は差し迫った脅威がないことでもあるし、その時期を平和時でも規定するならば、その期間の防衛力は量より質を目指し、緊張ないし有事の際に所要の防衛力ができるように基盤的防衛力を維持するという考え方をとれないものかと検討してやったわけです。

「基盤的防衛力の考えは、どういう経緯で、だれが発案し、方針として、どうして採択できたのか。特に制服組から批判があったことから、それがどう検討されていたのか、もう少し詳しく説明せよ」ということについては、今お話し申し上げたことで大体おわかりいただけると思うのですが、制服は、ご承知のように、所要防衛力構想で基礎的防衛理論に対して反対した。最初、海軍は5個防衛隊軍だ。大綱の考え方自身は、4個ではなくて5個なんです。5個はなければ意味のあるものじゃない、その考え方はまだ捨てていないはずです。ただ、この時点では、経済的に困難ということだけであって、私の考え方としては5個防衛隊軍なんです。しかし、海上自衛隊はそれを主張したわけです。ただし、大蔵は、どうしても4個でないとだめだというし、当分それでいこうということで落ち着いた。それで一応制服も納得した。中には納得しない者もいたに違いないと思います。

ただ、国会で上田哲君の質問に答えて、日本はアメリカとの間に秘密協定があるんじゃないかという質問があって、いつもならそれで国会はストップするんですけども、いや、調べてみたが、秘密協定はない。しかしながら、先ほど申し上げますように、シビリアン・コントロールのもとに作戦協力・研究をやるべきと思う。そのときに「海域分担」という言葉を使ったんですが、それよりも、いろいろな面でこれからは幅広く考える必要があるのではと、「日米分担」という言葉を「日米防衛協力」という言葉に改めたんです。この辺は余り知られてないんじゃないかと思いますね。

そこで、われわれは、野党のいうことを逆手にとって、むしろ日米防衛協力を積極的に推進する。そして防衛、国防長官同士が毎年話し合う。今までも会ってはいるけれども、ただ会っているだけの話で、きちんとした内閣の承認のもとにやっているものじゃないんですね。私の考えでは、そんなのは意味がない。だから、日米防衛協力を継続してやるた

めには、その前にハワイで事務次官クラスとユニホームを交えた日米防衛協議を必ずやる。ことしは日本でやり、翌年はアメリカでやるという風に繰り返す。それをずっと続けてきた。それが防衛協力の指針（ガイドライン）になった。

そして日米防衛協力関係あるいは研究活動は非常に活発になってきた。それが今日まで続いている。その意味合いは非常に大きいものがある。これで、坂田長官というのは全くだめな男だと思っていたけれども、こういうことをやるならいいじゃないかということでみんな納得したのではないか。私は政治家ですから、そういうふうに私流に慰めているわけです。

五十嵐 沖縄返還のとき、日米共同声明で、佐藤首相が韓国、台湾、インドシナ情勢を日本の安全保障にとっても重要な要素と表明したことと、その後の防衛政策の検討とはいかなる関係があったのかという点について、ご説明いただければと思います。

坂田 この質問の意味がよくわからないのです。

五十嵐 韓国の情勢は、日本の安全保障にとって枢要でしたでしょうか。台湾が重要な要素ですね。それから、インドシナについても重大な関心を払うという言葉を使っているんです。

そのときに、ニクソン・ドクトリンの後の情勢で、アメリカ軍が撤退するといいますが、軍隊を削減していくことが前提になっていまして、まだベトナム戦争はやっていましたけれども、アメリカの軍事力自体は削減し始めていたのですね。

沖縄返還のときの条件は、沖縄は日本に返還する。しかし、軍事的な使用について、アメリカの軍事活動の上で支障がないようにということをアメリカ側は考えていたと思います。ですから、そのときにアメリカが朝鮮半島、台湾、インドシナについて、まだ安全保障上のコミットメントをしていますから、それをアメリカだけでやれなくなるといいますが、あるいはアメリカがやる場合に財政的な面とかお金の面で不自由な状態になることを想定したのではないかと私たちは思っているのです。

日米共同声明のときに、安全保障でいえば、ある面では当たり前かもしれませんが、当時の日本首相である佐藤首相が、そういう安全保障上の関心を持っていることを表明しているわけです。沖縄返還のときに、そういう方針を日本の政府も承認しているものですから、それがその後の日本の防衛政策に何らかの影響を与えているかいないかという

ことなんです。

坂田 返還はするけれども、基地の使用は十分にやってくださいという取り決めになっているわけでしょう。それは日本の安全保障にとっては一番大事なポイントですから、それを継承するのは当たり前じゃないですか。

五十嵐 ですから、基盤的防衛力の場合もそうですけれども、アメリカ軍がアジアから削減されていった場合に、どのようにして安全保障を確保するかという問題が出てくると思うのです。

坂田 その問題が出てきているから日米安保があるのです。これは切っても切れない日本の安全保障です。そのために沖縄も非常に大事だといえると思うのです。

五十嵐 ただ、共同声明の内容がかなり具体的になっているのです。極東の安全と平和が安全保障条約の極東条項といますか、第6条の問題になっていくと思うのですが、それまでは三矢計画その他があって、朝鮮半島の有事は重要だということがいわれていますけれども、必ずしも防衛政策自体にそれが反映されているわけではなかったんじゃないかと思うのです。

ですから、具体的に朝鮮、台湾、インドシナを挙げて、日本の安全保障にとっても重要な問題だと首相が表明されたわけですから、アメリカに対しても、そういう地域での紛争に対しては日本側も支援し、協力するというような公約になるのではないかと考えたのですが、そういうところは余りお考えならなかったのでしょうか。

坂田 余り考えていなかった。

齋藤 坂田さんの構想は非常にわかります。結局日本の防衛ということで、日本の専守防衛という観点で、小さいけれども、大きな役割を果たす。その限りにおいて、日米安保条約は非常に重要である。

ところが、アメリカがベトナム戦争でああいうことになり、結局アジアから少しずつ退いていく。その場合に、日本の安全保障だけではなくて、広くアジア全体の安定のためにアメリカが今まで果たしていた役割を、アメリカはある程度削減せざるを得ない。

その象徴的なのは、ずっと後になりますけれども、92年にフィリピンのスービック基地から引き揚げた。カーターも韓国から引き揚げようとした。それを日本は押さえたけれども、アメリカとしては、もう日本も経済大国になったのだから、日本の専守防衛だけではなくて、極東あるいは広い意味のアジアの安定のために、何がしかのコントリビューションをしてほしいという気持ちがあった。これはアメリカの国防担当の当事者だけではなく

て、国民の中にも、タックスペイヤーとして、おれたちの税金を使って、なぜあんな方に軍隊を置いておくのか、という考えがあります。

そのあたりが、さっきの坂田構想はすばらしい構想なのですが、もう1つ時代が少しずれてきた場合にどうなるのでしょうか。

坂田 これはその次のニクソン・ドクトリンの話と関連してくる。

齋藤 そうそう。ニクソン・ドクトリンあたりから、明らかにアメリカはアジアから少し引き下がるという傾向ですからね。

坂田 だけど、私はその辺は非常に楽観的だったわけです。だから、アメリカにとっても引くというのは大変なことだ。しかし、ただで引いたわけじゃない。そこに意味づけするのは中国だった。以来ニクソンがずっと折衝を続けて、1978年に中国との国交回復を樹立した。69年から10年かかっているわけです。

しかし、そのねらいは、政治的なカバーを何にもしないままで兵を引くなんということとはとんでもない話で、それは日本にとってもそうなんです。アメリカの外交政策が、中国との国交樹立に引き込んでいったといいますか、それは大きいです。だから、引くは引くだけけれども、同時に、中国にカウンターウエートの働きを期待した。つまり、中ソ一枚岩から中ソ対立へ移行させた。そして対立から今度はカウンターウエートへという形で、米中回復をした。それがあつたればこそ、朝鮮半島を含むアジア地域でも日本の安全は保てるんだという仕組みです。

齋藤 おっしゃるとおりだと思いますのです。やはりそういう米中関係の改善という大きな枠、中国とアメリカとの関係が非常によく改善されてきたことが、アジアの安定に確かに大きく寄与している。それはおっしゃるとおり基本なんですけれども、争いがあちこちで起こる場合に、アメリカのプレゼンス、存在というものが、今まで大きかったのを、アメリカが引こうとしている故に、ある程度日本が肩がわりをやってくれということで、日本のプレゼンスも必要ではないかというのがアメリカ人の考え方なんです。

坂田 それはもちろんです。むしろそれは軍事力では限界があります。したがって、経済関係で考慮します。だから、日米防衛協力という場合は、そういうものも含めるんですという気持ちが実はあるわけです。それは当然のことだと私は思っているんです。

五十嵐 第3に、日米防衛協力をお始めになったときに、ニクソン・ドクトリン以降のア

アメリカのいわゆるアジア離れを考慮されていたのかどうか、ご説明いただければと思います。

坂田 ポスト・ベトナムですね。アメリカはむしろこれによってフリーハンドを持った。新しい外交の始まりだ。ヨーロッパに重点を置くと同時に、北東アジアにも重点を置く。しかし、アメリカは既に73年にパリ和平協定で米軍の撤退を決めていた。

そして、駐留米軍を削減する代替措置として、中国をソ連寄りから引き離し、カウンターウエートの真の秩序を確立した。そのため、1969年5月14日に和平提案をした。1969年7月25日のニクソン・ドクトリンから10年後、1979年1月1日、米中国交回復を達成した。こういうアジアからのアメリカの兵力削減は、日本にとっては非常に厳しさを増すけれども、むしろそのことによって、我が方の日本の防衛努力を積み重ねるいいチャンスでもあるというのが私の認識です。

だから、私の防衛政策の3つの柱の1つは、国民の防衛に関する意思といいますか、国を守る意思が強固であること。2番目は、必要最小限度の防衛力はこれを確保すること。それは外にあっては脅威になるような大きいものであってはならない。内にあっては民生を著しく圧迫するようなものであってはならない。過大でもなく過小でもない防衛力が必要なんだ。しかし、それで終わりかといったら、それじゃだめなんだ。日米安保条約があって、いわばこの3本柱があって初めて日本の防衛政策が成り立つ。だから、その条件が崩れてくれば、防衛計画大綱は根本的に練り直さなきゃならないというのが実は私の考え方だったわけです。

ニクソン・ドクトリン以降の話ですが、繰り返しになるかと思えますけれども、69年に大統領に就任して、7月にニクソンがドクトリンを発表した。佐藤首相は同69年11月に訪米してニクソンと会談をしております。また、71年7月にはレヤード米国防長官が来て、佐藤首相にニクソン・ドクトリンについて説明している。72年2月にようやくニクソンは訪中して、毛首席、周首相と会談し、米中共同コミュニケを発表しました。

同年7月には田中内閣が成立し、9月には田中首相が訪中して、9月29日に日中国交正常化の共同声明を調印している。10月に大平外相はニクソン米大統領に日中国交正常化について説明をしている。

一方、ヨーロッパにおいてはどうかというと、69年10月にはブランドが西独首相となって新内閣を発足させた。翌70年8月12日には西独とソ連との条約が調印された。70年4月16日にはSALT交渉（米ソ戦略兵器制限交渉）が開始された。72年には西独と中国との

国交樹立を達成した。5月26日にニクソンが訪ソして、SALT-Iが締結される。73年には米ソ核戦争防止協定が調印される。翌74年にはフォードが訪ソして、SALT-IIを合意する。

ですから、日米防衛協力を始めたときに、ドクトリン以降のアメリカのアジア離れを考慮していたのかというご質問ですが、軍の撤退縮小は当然のことで、また一方、米中国交回復という政治的成果を獲得したわけです。

五十嵐 第4に、カーター政権の在韓米軍全面撤退論について、いかに検討され、また対処されたのか、ご説明いただければと思います。

坂田 私はシュレジンジャーに95年にお会いしたわけですが、朝鮮半島問題でも、北の動きがおかしい。発砲事件なんかもあったのですけれども、その前の年にやはりいろいろな問題が起こった。そのときに彼は、場合によっては戦術核を使うこともあり得るということを決然と言明しましたね。

これに見られるように、あの時期に北朝鮮側の動きがかなりあって、中国とも話し合いをしている。しかし、結局断られる。ソ連とも話し合いをしたけれども、だめということでした。それがエスカレートすればおかしくなっちゃったけれども、こっちの情勢分析でも、中国も動かないし、ソ連も動かないから、北朝鮮だけではどうにもならないだろうという情報が入っておりました。

その中で、シュレジンジャー長官の強い姿勢といいますか、毅然たる態度は、私は非常に好感を持ったわけです。例えば彼の国防白書などを読んでみると、エビデントなデンジャー、アンサーティンな又は隠されたデンジャーなど、危険な要素を3つばかり挙げておられます。

例えばアンゴラなどの第3世界へのソ連の進出について警告している。我々もデタントの行動を警戒的に見ていた。その例が、韓国からの米国の撤退問題であった。カーター大統領が選挙公約で、韓国からの地上軍撤退を主張したが、私たちは反対した。

後に駐日大使になりましたマンズフィールド上院議員は、76年3月にやはり撤退論を述べたのです。それはよくないということで私は議論しました。朝鮮半島で紛争を引き起こさないためには、米軍の駐留が不可欠だと私は主張しました。マンズフィールドは、海と空がいるからいいじゃないか。それに対して私は、地上部隊の駐留こそが心理的な安定感

を与えるために絶対に必要であるといった。その後、彼もだんだんわかってきて、駐日大使になってからは意見が変わってきたと思います。

私は76年に防衛庁長官をやめるわけですが、翌年、やはり韓国からの米軍の撤退問題について日本はどう思うかということで聞かれました。私はそのとき安全保障調査会の会長をしておりまして、「韓国からの米軍撤退問題について」という昭和52年3月8日付の書き物が残っておるのです。

1 在韓米地上軍の存在意義

在韓米地上軍の存在意義は、何よりも第一線配備による抑止力である。その構成要素は、軍事的に見ると、4つの要素があると思われる。

その1つは、米軍の第一線戦車であるM60を主力とする歩兵師団である。

その2つは、射程140キロメートルに及ぶ、非核、核両用、地対地ミサイル、即ち、サージャント、オネストジョンを装備した第4ミサイル、コマンドである。

そして、それが板門店からソウル、鉄原からソウルを結ぶ三角地帯を大きな火力でカバーする。

その3つは、地対空のナイキハーキュリーズ、スホークの防空砲兵旅団である。

その4つは、兵站支援機能（特に弾薬補給）である。これが在韓米軍の補給支援はもちろんのこと、韓国軍及び戦場拡大の際、ハワイ又は米本土からの来援米軍の補給にもあたる機能を持っている。

2 われわれの意見

カーター政権の在韓米地上軍撤退が、どのようなものか具体的にはまだ示されていない。恐らく時間をかけて、段階的に慎重に行われるものと思われる。（中略）

重要なことは、米地上軍の存在が、アメリカが誓約を守る象徴であると受けとられていることに留意する必要がある。

また、アジア民族にとって、地上軍のプレゼンスの与える政治的・心理的影響は大きい。

陸軍の代わりに空軍をもってするともいわれているが、空軍の威力は絶大であっても絶対ではない。（中略）

冷戦時代の往時とデタントの今日では、世界の情勢が著しく変化しているにしろ、米国务長官アチソンの声明（1950年1月12日）のあと半年を出ずして、朝鮮戦争（同年6月25日）が勃発した事実を想起する必要がある。（以下略）

このような政治的発言をしているんです。こういうことで、在韓米軍の撤退には我々は

反対を表明したわけです。

五十嵐 これからももう少し細かいことをお伺いしたいと思います。

坂田 もうこれ以上何も出てこないと思います。

五十嵐 というのは、私は先生のお書きになったものを拝見して、日本の国内政治を非常に前提にされていると思ったのです。

坂田 それしか知らないからね。(笑)

五十嵐 さっきおっしゃったように、防衛力構想について、政策策定の過程等で、ある面では公開といいますか、かなりオープンにされたことと、もう1つは、そういう面では民主化していくということをやられたと思うのです。その辺の意図や政策の内容については非常によく勉強させていただいたんです。

ただ、私が先生の書物を拝読しますと、当時の情勢からいって、非常にうまく適応しているんですね。必要性といいますか、ある面では日本の防衛問題の転換が必要な時期に先生がやられたことが非常にうまくマッチしているんです。そこがなぜこんなにうまくマッチしたのでしょうか。

坂田 どういう点がマッチしたと思われるんですか。

五十嵐 先ほどお見せいたしましたように、久保さんがどのようなことをお考えだったのかというのは私も一応勉強させていただいたんですけれども、久保さんがお考えになっているのは、私たちのように、ある程度安全保障を勉強している者にとっては非常に理解しやすいように、当時の情勢からいって、当然考えていておかしくないことをちゃんと考えていらっしゃるんですね。

ところが、久保さんがお考えになっている考え方と坂田先生がやられたことは、国際情勢を考える見方と、国内にそういう考え方をいかに浸透させていくかというので、非常にマッチしているんです。

坂田 だって、彼は防衛局長であり、次官であり、私を支えてくれた男ですから、そうなるのは当然のことじゃないかと思うのです。どの点がどうなのかがよくわからない。

五十嵐 1つは、防衛問題でいえば当たり前のことになるんですが、日本の国民に、防衛がいかに重要な問題であるかということはどうやって知らせるか。

それから、国内のコンセンサスをつくることが重要だとおっしゃいましたが、ちょうど

ニクソン・ドクトリン以降の時期は、そういうことが日本にとって非常に必要になってくる時期だったと思うんですね。それ以前ですと、米軍が日本の基地を利用するような状況だったと思うのです。これは占領時代からの継続を考えていきますと、日本の基地の必要性というのは、必ずしも日本の防衛のためであったわけではない面がありますね。むしろアメリカ軍が、もともと基地が必要だったから、日米安保を結んだ。それに吉田さんがそれなりの考え方で日本側の必要性を満たしたということで、思惑が全然違うところで、しかし、共通するものをつくったというような関係だったと思うのです。

ところが、ベトナム戦争でアメリカ国内での反対があったものですから、米軍がそれまでと同じようなことをいってられなくなったわけです。ですから、米軍にとっても、アメリカ国内の支持が必要である。そのために合理的な再編成が必要になる。それをニクソンやキッシンジャーがやられたと思うんです。そうしますと、必ずしもアメリカ軍がアジア地域にいるのが当たり前ではなくなっていくと思いますでしょう。

そうしますと、日本としてもアメリカ軍がいるのが当たり前で防衛政策を考えていたのは条件が違ってくるといふふうに考えられると思うんです。久保さんがお書きになったものを見ていても非常に驚いたのですが、ニクソン・ドクトリン以降の情勢を考えれば、アメリカ軍がアジアから撤退するというのも考えられないわけではないということを書いているんですね。

当面そういうことが急には来ないかもしれないけれども、アメリカ軍が日本からいなくなるような事態とか、そういう可能性が全くないわけではないということも一応考えて、将来に向かってどういう方向に行かなければいけないかということをお考えになったのではないかと思うのです。基盤的防衛力をどのように評価するかは別としまして、こういうことがあるのです。

中国人と話をしていたとき、日本の陸上自衛隊は15万しかいない。中国は300万もいますから、戦争にならないじゃないかといいましたら、中国人にいわせると、それはワイマールのときのドイツと同じだ。平時に15万いれば、戦時に100万になるのは簡単だ。ですから、軍事的にそれほど大がかりで野心的なことを考えないとしても、戦力の評価からいきますと、非常に組織立った質の高い軍隊がいれば、それがコアになり、核になって広がっていく。

これはアメリカの第二次大戦以前の軍隊がそうだったのです。第二次大戦後のアメリカは、平時でも大規模な軍隊を抱えていますけれども、第二次大戦以前ですと、戦時には動

員しますが、平時になると動員を解除する。先ほどおっしゃったような形で小規模な軍隊を維持する。しかし、戦時が始まると、動員で拡充していく。

ただし、その場合には、例えば徴兵の問題とか、あるいは民兵、アメリカでいえば州兵で軍事訓練をやるというような前提条件が必要になると思います。そういう体制をとっていけば、平時において軍隊の規模は小さくても済むだろう。しかし、そのためには、先生がおっしゃったように、日ごろから国民の支持、意思、訓練というものがないと、全然準備がない人間を集めてきてもだめだということになります。そういう点でいうと、非常にうまく情勢を判断されて、それに見合った準備をされたように私たちには思えるんですね。

ですから、そのところは、先生がおっしゃったように、先生なりの防衛の問題だけで済んだのか、それとも久保さん等と相当議論なさって、そういう基盤的防衛力の意味を確定されていったのでしょうか。

坂田 それはもうしょっちゅう議論はしていたんです。久保君だけじゃなくて、丸山君という優秀な部下が、どっちかといえば硬派なんです。久保理論にはむしろ反対のところもあつたんですね。それを調整する役目が私だった。もうやるべきだということで、議論は非常に活発にやりましたね。ユニホームも入れて議論をやった。それは今までにないことだったんじゃないですか。学者では佐藤誠三郎君とか、京都の高坂正堯君とか、若手の人とユニホームの人たちと会を持つとか、かなりやりましたね。そういう議論は今まで余りされていなかったと思います。

ところが、そういうことを久保君だけが発言しそうになるから、あなたまだちょっと待て、ほかの意見も聞かなければととめる場面は何回かありました。

五十嵐 制服の人たちも発想の転換といいますか、かなり新しい考え方だったのではないかと思うのですが、そういう点では、制服の方の中でもかなり支持が出てきたということでしょうか。

坂田 後では出てきましたね。

五十嵐 そうすると、防衛庁内部での議論がかなりあつたということになるのですか。

坂田 ありますけれども、これはもうどうしても絶対だめだとか、そういう反対はほとんどありませんでしたね。

五十嵐 制服組の方は、昔の陸軍士官学校とか、海軍兵学校の出身の方がまだいらしたのではないかと思うのです。

坂田 おりました。

五十嵐 そういう人たちも、やはり新しい状況だということで、基盤的防衛力でいいというふうにお考えになったのですか。

坂田 いや、基盤的防衛力という言葉自体といますか、その考え方自体が、脅威を前提としない防衛体制はナンセンスだ。その一点張りですね。

五十嵐 そうすると、そういう点では余り理解してもらえなかったわけですね。

坂田 していません。わからせることが難しいんです。簡単にはわかりませんよ。

五十嵐 そうしますと、防衛庁の中でのシビリアン・コントロールがかなりしっかりしていたということになりますね。

坂田 しっかりしていたといえるかどうかわからないけれども、余り逸脱はしてなかったように思いますね。

五十嵐 今でいえば防衛族議員というようなタイプの議員の方もいらしたと思います。私の記憶だと、源田実さんがまだ現役だったと思います。ああいう昔の軍隊の方ですと、相当発想が違うと思いますけれども、そういう自民党内部の反響はいかがでしたか。

坂田 私は源田君とも仲がよかったから、いうならば、彼はユニホーム代表だという気持ちでつき合っていました。しかし、彼は彼なりに批判はあったと思いますね。

五十嵐 そうすると、大綱の時点では、それほど表には出なくても、批判をするということとはなかったんですか。

坂田 なかったですね。それで三木内閣でしょう。みんなの関心がこういうことでなくて、三木倒しに凝集していったんですよ。そこは政治家ですから、うまく利用したわけです。今こそでっち上げよう。(笑)

齋藤 これは変な仮説ですけども、もしあなたの時代にこれができなかったとします。三木倒しが急に成功して、三木内閣が早くつぶれてしまった。そうすると、どうなったでしょうか。

坂田 恐らく相当右寄りの人が出てきて、これはできなかったでしょうね。ガタガタして繰り返しになっただろうな。

五十嵐 恐らく戦後の防衛政策の中で画期的なことだったと思うんです。

坂田 結果としてそう思えるわけですけども、ただそのときは夢中でした。シュレジンジャー会談なんか、本当にひょうたんから駒が出たようなことです。上田哲君の質問から始まったわけです。それで逆手にとって引き入れちゃった。それで余り文句をいわなくなっちゃった。

五十嵐 ご本を拝見していますと、総合安全保障ということをお話しになっていますね。
あの本は77年でしょうか。

坂田 そのころは、まだそこまでは行ってないんじゃないですか。総合安保が出てきたのはその後だと思うんです。安全保障調査会長になって、いろいろな人材を寄せて、話し合いを始めてからだと思いますね。

五十嵐 ですが、先ほど日米防衛協力ということで、必ずしも軍事だけではないとおっしゃいましたが、78年の福田ドクトリンのときには、もう総合安保に近い考え方になっていたと思います。

坂田 もうなっています。

五十嵐 それ以前でも、例えば日韓条約のようなものは、韓国軍をベトナムに動員して、経済的には日本側が韓国を支援するというようなアメリカの考え方があったと思いますが、そういう意味では、軍事以外の問題でどういうふうに協力するか。

坂田 いや、私の場合は、それは観念的な話で、まだそこまで行ってなかったです。

五十嵐 ですが、拝読しておりました、後から見ると、かなりつながってくるような気がするのです。

坂田 そうですか。先見の明ありますか。(笑)

五十嵐 先見の明があったといいますか、安全保障を軍事から入る人と、ほかの国際関係とか、外交から入る場合と、見方が相当違うと思うんですけれども、外交を重視するような安全保障政策というのは、日本の特徴ではないかと思います。アメリカでは、安全保障が、1950年代以降、非常に軍事的になっていってしまいますね。

坂田 例えば三木さんから何かの指示があったのかとよく聞かれますけれども、ほとんど何にもないのです。その辺もおかしな話なんですね。

五十嵐 日本の政権のおもしろいところですね。(笑) アメリカですと、ちょっと考えられません。

坂田 考えられないでしょう。

五十嵐 こういっては失礼ですが、余り専門的でない方が大臣になった場合に、どのような政策をとるかというのは、日本の場合には大臣の在任期間が短いものですから、非常に重要な点だろうと思うのです。

坂田 やっぱり1期じゃだめですね。私は2期やらせてもらったから、まあ自分なりのやり方がある程度できたと思います。ミグ25が飛んで行って、函館に強硬着陸した事件

があったり、結構いろいろありましたね。

五十嵐 防衛問題では、どなたか親しくお話しするような方はいらっしゃったのですか。

坂田 だれもないんですよ。齋藤眞先生ぐらいです。(笑) 本当にいなかったですね。

五十嵐 外交の問題でも、アメリカとの関係を話す方は余りいらっしゃらなかったんですか。

坂田 このメンバーの人ぐらいでしょうね。余りいなかったですな。

五十嵐 そのメンバーの方はやはりご自分で選ばれたわけですね。

坂田 ええ。平沢君かな。

五十嵐 73年までは、日本人のアメリカに対する感情は必ずしもよくないんですね。特にベトナム戦争があったからだと思うのですが、74年になると、だんだんよくなっていくんです。

坂田 私が大臣になったのが74年の暮れですから、75年、76年しかわからないのです。先生のお話は1969年以降からということだったから、戸惑いました。(笑)

五十嵐 カーター政権は、それまでの政権とはやはり相当性格が違っていましたね。在韓米軍の撤退論をやめさせる経緯を、以前、アメリカの人から聞いたことがあるのですが、ある面では新参者で、それこそワシントンで仕事をしたことがない人が、ジョージアから新しくやってきたわけですね。カーターさん自体は海軍兵学校ですから、軍事を知らないということはないわけです。ただ、専攻は技術関係なんです。

坂田 そうだったんですか。

五十嵐 だから、それに対して国際情勢からどうであるか、先ほどおっしゃっていましたが北朝鮮の情勢その他を教えるような活動を、カーター政権の内部で大分行っているのですね。

齋藤 坂田さんが大臣のときには、久保さんという非常にすぐれた補佐がいたわけですね。だから、さっき五十嵐さんがいったように、シビリアン・コントロールができた。制服組が少し反対しても、それを押さえることができた。そういうシビリアンの次官あるいは防衛局長と、制服の幕僚長とかそういう人たちとの関係は、その後もシビリアンのにらみが効いているのですか。というのは、制服組も、防衛大学1期生とか、そういう人たちが出てくると、防衛大学からずっと来ているということで、彼らはやっぱり一種の自信を持っていると思うんです。それに対して次官とかいう人は、よそから来たりして、その辺が久保さんみたいににらみが効くのかどうか。

坂田 あの時代から比べると、そういう押さえはもう全然効いてないんじゃないかなと思います。丸山君にしても、久保君にしても、やっぱり人物でしたもの。丸山君は、例の浅間山荘事件を解決した現地の指揮官です。

議論をやっているだけでも本当に楽しかったですね。そのうちにユニホームも一緒になってワイワイやっていた。それは1つ、三木内閣で、みんなの関心が三木引きおろしにかかっていた、そこですよ。(笑)そこをこっちが利用したというだけの話です。

五十嵐 それはおもしろいです。

坂田 おもしろい。でも、それが実際なんです。

五十嵐 どうもありがとうございました。